

第2回「美しい四国づくり委員会」議事要旨

【挨拶+意見交換】

1. 北橋局長挨拶

昨年9月の第1回委員会では、四国の魅力とは何か、どのように磨きをかけていけばいいのか、様々なご意見をいただいた。

今回は、今後どのような取り組みを進めていくべきか、具体的な事例に基づく議論をさせていただきたい。すでに始められているいろいろな景観づくりの取り組みがうまくいかないのはなぜか、うまくいっているところはどうか、といった観点で具体のご議論をいただきたい。

美しい四国づくりは、基本的には住民主体で行政が支援という形で進めることが大事なのではないか。この委員会がそういった取り組みを立ち上げる運動機関として、あるいはフォローしていく推進機関として継続的にご審議、ご指導いただきたい。

一方で新しい国土形成計画に向けての議論がスタートしようとしている。ぜひこの委員会での議論のエッセンスを反映させていきたい。

2. 梅原委員長挨拶

第1回の議論は、四国の魅力、美しさはなんだろうか、どのような取り組みをしたら良いか、活発な討議がなされた。

四国は、まだ日本の原風景が残っている地域であり、安心とか心の安らぎといった美しさ、歴史に根ざした自然と風土の相まった美しさ、ヒューマンスケールの美しさ、がある。

しかし海や、川、都市は開発の後遺症が色濃く残っている。

四国の人は四国の美しさに気づいていない。

四国に住む人は共通認識を持ち、来ていただく人々に「ここはあなたの四国ですよ」と、四国固有の文化、お遍路文化、お接待文化というものをブラッシュアップすべき。

これからは、女性、老人、外国人も満足する、おしゃれで、安心感のある分かりやすいまちづくりが必要。そのためにあるものを残しながら新しいものもつくっていくことが必要。地域に根ざした、地域を愛する人材が必要。

美しさをブラッシュアップしていくには大変長い時間がかかる。そのために国土交通省としては、手を挙げた地域、人たちががんばれるような応援をしていきたい

い。

このような話の流れだった。

(「美しい四国」基本理念 スライド)

3. 意見交換1

梅原委員長

「美しい四国の基本理念」「美しい四国づくりの基本方針」について意見交換をしていただきたい。

立木委員

「四国はひとつ」は、ある意味とっても無理のある話。

「四国は一つ一つ」は悪いことじゃない。中心市街地で全体のコンセンサスを得ようとすると足踏みして前に進まないということがある。

「四国はひとつ」という大きな目線で捉えるのと同時に、「四国は一つ一つ」であるという心を大切に、つなぎあっていくのが良い。

徳島県上勝町では彩り事業が全国的に大変注目されている。花の咲く木を植えるから、まちがきれいになっている。しかも出荷時期をずらすために違う種類の桜を植えるから満開時期が長い。

四国の山が荒れていくのを実感する。しかし上勝町ではスギ林をどんどん花の咲く木、紅葉する木に植え換えることで、美しい風景が取り戻されている。美しいまちをつくらうとするのではなく、仕事になり、結果として美しくなった、こういうものがヒントになると思う。

人口2000人の街に、年間3000人の視察が来る。何かを学びに人が来るのがポイント。どういう交流をさせるかが一つのキーワード。

お四国と語られるところにいろいろなものが表れている。お遍路さんがベース。

四国の財産、材料をどう膨らませていくのかが大きなヒントとを感じる。

岡田委員

「癒しの遍路道」というテーマでフォト・アンド・メッセージコンテストをやった。本当に四国は様々な表情を持っていて、同時に非常にきれい。

こんなに美しいものをもっと発信できないか。さまざまな形のフォトコンテストをまとめて、もっと強いメッセージとして伝える、四国以外の方にも伝わるような方法はないだろうか。観光協会、国土交通省、メディアの歩調が合わせられないか。

日本の全国各地のことを表現するのに津々浦々というのがある。海と陸地の接点。

瀬戸内海が日本全国を表現する形になっていたのでないか。

基本理念と基本方針は、この通りだと思うが、原風景など必ずしも四国でなくてもあてはまる部分がある。癒しとかお遍路という観点がもう少し色濃く打ち出せたらと思います。

木村委員

基本方針の「2. 風景と調和した新しい美の創造」は大事だが、風景だけでなく、歴史との調和が大事。今のように成熟した社会では、かつての先輩の知恵と汗、涙を振り返るときが来ている。

お遍路さんは皆一人で出かけるが、杖（弘法大師）により二人連れとなる。四国には一人で行っても友達がいる。これはほかの地方にはない。お互いに助け合い、友達と一緒に過ごす世の中のいろいろな情報も忘れて安心が出てくる。そのような友達が出来るのは四国の特色。

一方では美しさ、花が大事だが実も大事。四国に花と実、両方あることは非常に大事。

四国は県ごとに個性があるが、お遍路さんがそれを結んできた。競争はするが協調もある、競争的協調がこれからの四国にとって一番良いこと。

(施策の取り組み事例と課題の分析 スライド)

(事例報告)

- ①重信川自然再生（美しい四国づくりモデル事業）
- ②松山市「坂の上の雲まちづくりの取り組み」
- ②愛媛県内子町の取り組み紹介

4. 意見交換 2

梅原委員長

事務局から出た事例、3先生方の具体的な事例を含めて、これから各委員にご発言いただきたい。

楠瀬委員

「分析のまとめ」に書かれているモチベーションは、飴が必要だと思う。意識改革だけでは動かない。楽しい、おいしいものがある、感動できる、地域経済活動が上向きになる、といった飴が継続させるきっかけになるのではないか。

成功している所にはリーダーシップの強いキーマンがいて、長く活動されていることがすばらしい。人材は地域にいるが、人材を育て、指導し、連携をとるのは官の役目ではないか。

行政の方は移り変わりが激しい。分かっている方が一つのところにとどまることが非常に大切。横浜市には国吉さんという方がまちづくりに長年携わっておられる。

高知 NPO の中に浦戸湾みらい会議があり、清水港色彩計画をお手本に浦戸湾の景観について活動している。清水港では、大学の助教授がキーマン。企業と国交省と連携をして長く取り組んでいる。

カナダでは、住み替えるというライフスタイルが良い景観をつくっている。住んでいる家を売るために、家も庭もきれいにする。周りの景色もきれいにしないと自分の家も高く売れない。景観を保つ良い循環が生まれている。

今大都市では、高齢者の家を買って若者に提供する事業をやっている。うまい循環をつくっているのだから、団塊の世代の I・U ターン対策としてもぜひ四国もやっていってはどうか。

井原委員

内子町長のお話から、地域はつくれば魅力的になることを強く思った。

大学院のプロジェクト研究発表で、塩江温泉を子供の歓声が聞こえる温泉のまちなしたらどうか、というものがあつた。子供たちが泥んこになって遊び、帰るときにお父さん、お母さんと温泉に入って帰る、というまちづくりの提案でしたが、美しい四国づくりの中には、人が輝いて存在しなければいけない。人がいて美しい四国がある。原動力はそこに住む地域住民ではないか。

ヨーロッパの街並みが美しいのは、そのまちに対する愛着が強いことに大きく起因しているように思われる。例えば、戦禍の中でまちを守ったことが、そのまちを魅力的に保持したいという思いにつながっているし、固有の文化を生んでいる。そこに暮らす人々が自らの力で自らの地を愛し、守る、という中で地域をつくらないといけない。そういう人々の思いをくみ上げるような取り組みがほしい。

人々が自分探し、自己実現を求めるときに、20世紀は職業や生産に求めたが、最近では地域の中で生活することに自分のアイデンティティを求める傾向にあると思う。地域の中で自己確認をし、自ら誇りうる地域づくりが出来る状況にあるので、そういう状況を官がうまく手助けする取り組みがほしい。

北橋委員

行政の人事が長いと良い仕事出来ることは否定しないが、一方で、やはり基本は住民が主役で、行政は支援。行政にもたれすぎではいけない。四国は今までどちらかというと行政にもたれすぎたところがあるのではないか。

今元気な内子、神山、梶原も共通しているのは、自分たちでここまで努力した、ちょっとこれだけ足りないところは行政で応援してくれませんか、という姿勢。

私たちは支援をするという立場で人が変わっても途切れないようなシステムをつくりたい。

基本方針は基本的には異論はないと思うが、大事なのは理念よりも行動計画で、内子町は自信を持っている地域だが、一般には自信がなくパワーがなく魅力がない、ということになっているのではないか。そこで、先生方に「地域の皆さんもって自分の地域の良さを知りなさい」「もっとおしゃれになるように努力しましょう」「皆で連携してがんばりましょう」と宣言をお願いしたい。さらに宣言に賛同するグループを公募し、委員会にも出ていただきみんなではめてあげて、自信を持ってもらえばよいと思う。

木内委員

運輸局の立場としては、美しい四国をいろんな人に見ていただく工夫をしている。調査費で地域の観光振興をやっている。高松空港も利用して脇町、塩江温泉を結んだ観光振興のプロジェクトを2年行った。委員会は本年度で終わりだが、自治体や旅館、観光関係の方からは、引き続き活動を続け、さらに魅力あるものにしていきたいとのこと。役所がサポートして、地域が継続して実施する望ましい形ができている。

梅原委員長

去年愛媛県で取り組まれたまち並み博は、パビリオンのない博覧会で、毎年ずっとフォローする全国初の試みで、大変すばらしい。

(欠席委員コメント)

立木委員

景観の美しさだけに惹かれるのではない。ストーリーや人が絡んでいることから訴えるものが出てくる。

静岡県三島のグランドワークで引っ張ってきたのは市役所の方で、住民に対して説得に説得を重ねて定着した。スタートは行政であっても、どこが発でもそれほど重要ではない。

私が今朝訪れた松山城では、カップル、老夫婦、親子、若い男性グループ、若い女性グループ、団体さん、外人さん、個人客とほとんどの組み合わせがあった。感じられている魅力はそれぞれ違う。観光には切り口がたくさんあり、その一つ一つに対してきめ細やかな、インターネットなどの情報提供が出来れば面白い。写真、ウォーキング、犬の散歩、時間がない人、建築に興味のある人、二人の世界、おいしいもの、などいろんな切り口。

分析のまとめの課題の「2. 経済活動」について、上勝で一番儲かっている農家は年間1000万円。年金受給者じゃなく納税者になり、医療費を使わない、老人福祉の最先端といわれる。そこに次世代が帰ってきて、世代の循環が起こっている。

子供の発信力は強い。子供が松山城のガイドをしても良い。

外国語の観光ガイドもあると、外国人の方も来ることが出来る。

北橋委員

美しさを議論するとき屋外広告物の議論は避けて通れない。

清水港は、規制や条例でなく、大学の先生が一人で企業を説得して回り、10年で美しい景観になった。

立派なリーダーがいるところは良いが、そうでないところはどのような取り組みをしたら良いかを、ぜひご指導いただきたい。

松山市・松本坂の上の雲まちづくり担当部長

電線を地中化するだけでずいぶんまちの景観が良くなる。それをきっかけにして地域の人たちが自分の街並みについて検討しようという話が出てくる。道後温泉では、道路整備によりきっかけが生まれた。景観法の制定によって、住民の方の考え方も必ず変わってくると思う。

観光客の情報は、来る前、来てから、帰ってからという場面があり、ITを活用した情報発信、携帯を活用した情報発信に取り組んでいる。また、高齢者向けに紙ベースも提供している。

観光の切り口には物語性をもたせて取り組んでいる。坂の上の雲、俳句などさまざまなジャンルの観光客に対応できる。派手な東京のような街ではなく、路面電車など活用したゆっくりとしたスローペースで街を楽しめる物語性を感じる街をつくりたい。

井原委員

さきほど申し上げた大学院のプロジェクト研究において、香川県塩江町で小学生にアンケートをとると、自然、黒豆のせんべい、しっぽくそばなどの、もしかしたら子ども向きではないかもしれないと懸念された食べ物が誇り、という答えだった。次代の担い手である子供たちがしっかり地域に根ざしていると感じたところであり、子供をもまきこんだ活動も必要ではないか。そうした地域全体を動かす人づくりの仕組みを考える必要がある。

八幡浜、内子などで南予の三都物語が出来る。八幡浜にみられるように、美しい四国づくりの素材はあるが、それを動かす人をどうやってつくり上げたらよいか、

今後取り組んでいただきたい。

木村委員

熱海は今、団体客が来なくて困っているが、一軒の宿屋はいつもいっぱい。和風料理にビーフシチューがちょっと出ることが評判。異質のものが入ると全体が輝く。

都市との交流は不可欠。田舎に都市的なものがひとつ入ると良い。

年寄りしかいないところは、老人が元気。この元気は売り出す価値がある。皆が見に来る。

町や村のPRに大学の先生をガイドとして使うと良い。

新幹線で通る静岡県には、看板がない。県の条例で看板を作らないようにしている。

電線の地中化は、必ずしも地中化しなくても良い。目に見えないような形に出来る知恵もあるのではないか。

ロープウェイ通りは良くやっている。歩く楽しさがあって、つい何か買いたくなった。魅力的な街並みになると思う。

梅原委員長

今回は、6月から7月にかけて、シンポジウムを実施したいと考えている。